吾輩は猫である　あらすじ

吾輩は猫、黄がかった淡い灰色にまだらがある。名前はまだない。女中のおさんにつまみ出されたが、主人の「置いてやれ」の一言でこの家に。主人は教師で胃弱な大食い。俳句を投書したり、謡をしたり、美学者の友人に乗せられ、写生も始めた。夜は子供２人と寝るに限るが、袋をかぶせられたり、畳で爪を研いで細君に怒られたりもする。近所の猫に軍人の家の白、代言人の家の三毛、そして猫中の大王・車屋の黒がいる。最近、主人の周辺で吾輩が評判のようだ。久しぶりに門下生の寒月が訪ねてきた。

主人は旅順陥落より女性が気になる。寒月君との散歩でも女性を観察、一緒に飲んだ晩酌で胃の調子がいいらしい。胃病にいいと聞けば何でも試すが、タカジヤスターゼは効かないと言い張る。吾輩は猫だが、大抵のものは食う。雑煮の残りが気になり、椀の餅にかみついたところ、身動きが取れず、妙な踊りを踊るはめに。笑われながら、ようやく解放してもらった。気分転換に二絃琴の師匠の猫、曲線美の三毛子に会いに行く。師匠は天璋院の祐筆の妹のなんとかで、三毛子は実の子のように可愛がられている。

門下生・水島寒月の紹介でその友人・越智東風がやってきた。朗読会の賛助員への参加を頼みに来たのだ。美学者迷亭が東風を連れて西洋料理屋で「トチメンボー」を注文、謎の料理をめぐるボーイと迷亭のやりとりを東風が主人に披露した。いつも迷亭に引っかけられる主人は愉快な様子だ。迷亭は飽きもせず、手紙で主人にクジャクの舌の料理を講釈してきた。二絃琴師匠の猫・三毛子が病気らしい。近所迷惑な主人のうがいのために、三毛子の病気は「薄ぎたない」吾輩のせいと疑われ、会いに行けない。

迷亭が「首懸（くびかけ）の松」について話す。首をくくりたくなる松で、今日こそと行ってみたら先客がいたという。寒月も、危うく川に引き込まれそうになった話をする。主人の苦沙弥も負けじと不思議な経験を話す。俗世から遠い３人にも競争心があり、猫から見ると人間は気の毒である。三毛子のもとに行くと、戒名がついていた。人間の医者が診てもだめだったらしい。主人宅は今月、苦しい。月に８缶もジャムを消費し、本代もかかる。不平ついでに細君は迷亭に、主人が赤ん坊に大根おろしをなめさせた話を披露した。

理学協会で「首縊（くびくく）りの力学」を演説するという寒月の稽古に意見をする主人と迷亭。歴史や方法、力学を、数式も駆使し説明する長大な演説を２人が混ぜ返すのでなかなか進まない。ある日、迷亭が主人に、越智東風が泉岳寺でドイツ人に遭遇した事件を話していると、かぎ鼻の女性が訪ねてきた。この金田夫人を吾輩は鼻子と呼ぶ。金田家は西洋館に住む実業家で、娘の結婚相手として、寒月の将来性や人柄を聞きに来たのだ。鼻子は寒月の主人宅訪問の際には、話の内容を知らせるよう、近所に頼んでいたらしい。

金田夫人は聞きたいことだけ聞くと、寒月には内密にと、帰って行った。主人はつぎだらけの着物のせいで馬鹿にされたと悔しがる。頼りにならない主人と迷亭に代わり、寒月のために吾輩は金田の屋敷に得意の忍びの術で偵察に出た。金田邸では夫妻が生意気な貧乏教師の主人を懲らしめる算段をしていた。電話室で話す令嬢富子は鼻息荒く、小間使にも当たり散らしている。家に戻ると寒月が来ていた。主人は金田夫人の来訪を寒月に話してしまう。偉大な鼻にちなみ、迷亭が鼻についての大演説を始めた。

吾輩はたびたび金田邸に忍び込んでいる。金田家の客、鈴木藤十郎は学生時代から主人の苦沙弥や迷亭を知っているという。金田夫妻は、教え子・水島の良縁を壊さんばかりの応対をする主人への不満を述べ、主人に会って、利害を諭すように鈴木に依頼する。急ぎ主人宅に戻ると、縁側では夫妻が互いにハゲや鼻の白髪を遠慮なくあげつらっている。鈴木の代わりに客用座布団に座っていると、主人につまみ出された。子だくさんの教師と比べ、鈴木はツイードの服に１８金の鎖をつけ、羽振りがいいらしい。

１０年ぶりに会う鈴木に実業家への嫌悪を示す主人だが、寒月と金田の娘との縁談が当人同士の意向と聞き、心を動かす。成就のためには寒月に博士号が必要であるという鈴木の論理にも納得してしまう。そこへ迷亭がやってきて、株の話から共通の学友で早世した曾呂崎の思い出話になる。迷亭は寒月が博士論文に着手したという報告ももたらした。鈴木が縁談の取り持ちを金田から依頼されたとも知らず、迷亭は、金田家への態度が軟化した主人に、英明で学者肌の寒月に金田の娘がいかに釣り合わないかを力説する。

主人は横文字の本を抱え、細君は末子のめん子に添い寝をし、とん子とすん子姉妹はひどい寝相で一家が熟睡している春の夜、泥棒が入った。吾輩が主人を起こすのをあきらめ観察していると、細君の枕元の、ずっしり重い箱入りの山の芋を満足そうに書斎の古毛布に包み、主人の羽織、細君の帯から普段着まで取っていく。翌朝、巡査に言われた盗難届の物品と評価額を巡り、夫婦はまたくだらない言い合いをしている。そこへ山の芋の贈り主で、かつてこの家の書生だった唐津出身の多々良三平がやってきた。

泥棒に入られた夫妻を愚か者扱いした多々良は、一番悪いのはネズミも捕らず、泥棒も教えない吾輩だと言う。役に立たない猫は煮て食うと物騒なことも言う。三味線屋に売られる前にネズミを捕ろうと、日露日本海海戦の東郷司令長官のごとく悲壮に策を巡らすが、２匹のネズミになぶられ、水がめに落ち、騒動のはてに主人に怒鳴られた。夫婦がまどろむ猛暑の午後、勝手知ったる風呂場で水を浴びてきた迷亭が、主人にパナマ帽を見せびらかし、自分で届けさせたそばを食べていると、冬帽をかぶった寒月が現れた。

寒月はカエルの眼球の研究用実験のため、一日中ガラスをこすっている。実験開始までに１０年や２０年はかかりそうだが、金田も承知しているという。その恋愛に理解を示した迷亭は、恋愛をせずに結婚した苦沙弥夫婦を馬鹿にし、自分は失恋ゆえの独身であるという。迷亭は、山中の一軒家で出会った文金高島田の女性や共通の旧友・老梅の結婚事件、かごに入れて売る幼女など不思議な話や、当世女学生論を展開する。そこへ越智東風がやってきた。寒月は自作の俳劇の構想を東風に持ちかける。

俳劇は一幕もので、虚子が行水する女性を見て一句朗吟するだけのもの。寒月の自信にもかかわらず、誰も感心した様子がない。次に東風が披露したのは友人・金田富子嬢に捧げる詩。苦沙弥も、誰も会ったことがない「大和魂」についての「名文」を朗読した。吾輩は最近運動をしている。カマキリを追う「蟷螂（とうろう）狩り」、木登りをしてセミに迫る「蝉（せみ）取り運動」、落ちるか降りるか微妙な「松滑り」、庭を一周する「垣巡り」だ。病や神経衰弱に運動や海水浴の効能が説かれ、運動をしない者は「下等」と見なされる。

運動をして汗ばんだ吾輩が、主人が週に３度も出かけ、顔色良く戻ってくる銭湯に忍び込んでみると、そこには「奇観」があった。人間は裸で生まれるのに、本性では平等を嫌って、衣服をまとい、衣服に差を付けてきた。人間の歴史は衣服の歴史、裸の人間は化け物であり獣に等しい。だが銭湯では、本来の姿で狂態をさらし出している。湯の中でひしめき、病気談議やうわさ話を繰り広げる。真っ赤になり浴槽に張り付いていた主人の大声に驚いて見ると、湯船の外で小生意気な書生とつまらぬけんかを始めていた。

大町桂月にもっと楽しめと批評された主人は、細君相手に酒を飲む。吾輩は頭をたたかれ、細君は「一番長い字」のうんちくを聞かされ、道楽修行は終わった。主人宅の北面にある落雲館の中学生が敷地を侵食してくる。主人が校長に訴えたところ、垣根を作ってくれたが、野球のボールが飛び込むのに変わりはない。生徒たちは主人の怒りを承知の上で、球拾いに侵入し、これ見よがしに騒ぎ、主人をからかう。追いかけて敵の「将官」に談判してもらちが明かず、主人はこの戦争の防御に思案を巡らせる。

敵地にダムダム弾を拾いに行かされる年少者を主人は容赦なく捕虜とした。落雲館から倫理の教師がやってきて、今後は断りを入れるとの約束に、この大事件は落着した。翌日の金田と鈴木藤十郎の立ち話によれば、金田は小生意気な主人に、実業家の腕前を見せてやろうと、学校の生徒を使っているらしい。主人宅には日に何度も生徒が礼儀正しく球を取りに訪れ、主人はかんしゃくを起こしている。主人は甘木医師に逆上症状の相談をし、催眠術を試みてもらうが、かからなかった。やぎひげの哲学者もやってきた。

主人は不平の数々を述べ立てる。西洋の積極主義では際限がなく永久に満足できない。日本文明は本来、自分以外のものを変化させて満足を得るものではないはず。やぎひげの哲学者は主人に、落雲館とけんかしても状況は変わらない、心を自由にする修行をし、平安を得よと説法した。主人には腕への種痘が顔にうつり出来た「あばた」があり、たいへん気にしている。家で唯一の鏡をのぞき込み、様々な表情をして映り具合を確かめ、冷静にその事実を自覚する。鏡はうぬぼれも生むが、自慢を消しもする。

珍しく玄関で迷亭が案内を請い、うわさの伯父を連れてきた。赤十字の総会のために静岡から上京したという。建武時代作という鉄扇を携え、ちょんまげにフロックコートという格好だ。伯父は、剣の道での心の修業を説いた沢庵の言葉を朗唱し、命がけの時代の精神修養を力説した。やぎひげの哲学者の受け売りで、主人が迷亭に東洋流の消極的満足の妙味を説くと、学生時代の共通の友人・八木独仙のようだと見抜かれた。迷亭によれば、独仙に感化され奇行に走った者が２人いるという。理野陶然と立町老梅だ。

主人と迷亭の同窓・立町老梅は天道公平と名乗り、巣鴨の病院にいるという。主人が感嘆して読んだ意味不明の手紙が彼からと知り、腹立たしい。おかしい系統に引かれるとは自分も変なのか、しかし健康と言われる周囲もまともな人間が見当たらない。おかしい人間が勢力を持つと、「健全」とされるのかもしれないと主人は思う。巡査の吉田虎蔵が泥棒を連れてやってきた。日本堤分署に盗難品を引き取りに来いというので出頭する。主人のめいの女学生雪江がきて、３人娘の相手をしつつ細君と話をしている。

水島寒月のモデルは、漱石の五高時代の教え子で、「天災は忘れられたる頃来（きた）る」という名言を残した物理学者で随筆家の寺田寅彦とされている。名言は高知市の「寺田寅彦先生邸址（やしきあと）」の碑銘の下に記されている。気脈が通じ合う２人は、終生、親愛と敬意にみちた濃密な師弟関係を結んだ。寅彦は、科学的な知識の豊かな所有者であり、それを師に惜しげもなく提供した。寒月の「首縊（くく）りの力学」（三章）にも、寅彦の知見が関わっていただろう。

迷亭と独仙は座敷で碁を打ち、入り口近くには東風と主人がいる。寒月の前には郷里から帰京の船中、ネズミにかじられ、端が欠けたかつお節がある。バイオリンもかじられた寒月は、請われるままに楽器独習の経緯を語り始めた。寒月の故郷では柔弱を嫌い、バイオリン入手も一苦労だったらしい。東風は人間が絶対の域に入るのは芸術と恋であると信じ、芸術の霊気に触れたいと、寒月に話を促す。迷亭は対局しながら、こちらの話が気になり口を挟む。寒月の話はじれったく、なかなか楽器購入まで進まない。

寒月の話はいまだバイオリンを入手できないまま続いている。ようやく購入、持ち帰っ

たが、弾けば音が出るし、隠し場所にも一苦労。迷亭は、音が出なくても露見した例を次々繰り出す。寝ている独仙を起こしてまで皆が注目した寒月の話は、結局弾くところまで至らなかった。寒月は実験用のガラス球磨きをやめるという。博士になれなければ金田との縁談に差し支えると案ずる主人らに、寒月は、金田と何か約束を交わしたわけではなく、実は郷里で結婚し、ネズミがかじったかつお節はその祝儀だったと告げる。

探偵が金田に結婚話を報告しているだろうと聞き、主人は苦い顔をする。近頃、自分だけうまく立ち回る探偵的傾向が見られるのは、個人の自覚心が強すぎるからだという。けんかも巧妙になっているから自覚心が増すと迷亭。いまや御上（おかみ）の威光では個人を動かせず、個人の自由を許すほどに互いが窮屈になると独仙も言う。そのような傾向の中では、結婚が成り立たないと迷亭は予測するが、東風は世の中で愛と美ほど尊いものはなく、その現実形態である夫婦と芸術はなくならないと真っ向から異を唱えた。